



# ふるさとジオ塾通信第15号

塾生のみなさん、こんにちは。

前回講座のテーマはおとなり浦河町の歴史でした。「なぜ支庁が様似ではなく浦河に設置されたのか？」という（一部の？）ジオ塾生にとって最大の関心事については、残念ながらそれを説明できる資料が確認されていないということで謎のままでした。しかし、明治時代から日高の行政の中心地であった浦河の歴史についてのお話はとても興味深く、受講したみなさんも純粋に楽しんでいました。さらには、おとなりを知ることは、わがまちのことを客観的に見直す良い機会になったのではないかと思います。アポイ岳ジオパークでは、今後も様似にとどまらず、エリア・分野ともに対象範囲を広げた活動をしていきたいと考えています。



## 第10回講座（2月）のご案内



さて、都合により1月の講座はお休みとさせていただきます、次回講座は2月となります。今回は近世北海道史が専門の北海道大学大学院の谷本晃久先生をお招きし、講演会形式で行います。演題は「幕府の『異国境(いこくざかい)』認識と蝦夷三官寺」です。本講座は塾生以外にも広く開放しますので、友人知人をお誘いの上、是非ご参加ください。

### 【第10回講座 座学「幕府の『異国境(いこくざかい)』認識と蝦夷三官寺」】

1. 日程：平成24年2月22日（水） 19:00～
2. 会場：町立様似図書館 ※いつもの公民館ではありませんので注意！
3. 講師：北海道大学大学院文学研究科 谷本晃久 准教授
4. 申し込み

事前の申し込みは不要です。直接、会場にお越しください。

5. 持ってくるもの  
アポイ岳ジオパークガイドブック 筆記用具
6. 講演の概要

“鎖国”とよばれる幕府の対外政策は、江戸時代初期、17世紀の国際環境に対応したものでした。唐人（中国人）や南蛮人（ヨーロッパ人）・朝鮮人は西南（東支那海方面）から渡来するものであり、従って、外国との窓口は九州におかれたわけです。北方はというと、松前の先には「蝦夷」＝東方の野蛮な地が無限に広がっていると認識され、その管理は松前の殿様に委任して事足りていました。しかし18世紀半ば以降、蝦夷の地の先に「異国」が現れます。ロシア帝国がそれでした。17世紀には想定できなかった事態に、田沼意次や松平定信の幕府は対応を迫られます。等澍院を含む蝦夷三官寺は、こうした対応のなかで構想され設置をみた側面があります。当日は、そのあたりの事情に焦点をあて、お話ししてみたいと思います。

### アンモナイトの化石が浦河でとれるわけ

### ジオコラム ⑫

前回講座の舞台となった浦河町は、アンモナイトの化石がよくとれることでも知られています。ところが、様似町ではほとんどとれません。なぜでしょうか？ アンモナイトは白亜紀という大昔（1億4000万年前～6500万年前）に繁栄したタコやイカの仲間、つまり海の生きものです。その頃、北海道はまだ島の形にはなっていませんでした。北海道の西半分はアジア大陸の端っこにくっついていて、東半分は遠い北の方にあり、両者の間には海が広がっていました。その海でゆらゆらと泳いでいたのが、それらアンモナイトです。やがて、遠く離れていた北海道の西側と東側の部分がプレートの動きで近づき、ついには衝突します。そのとき、間にあった海の底は2つの大陸に挟まれるようにして隆起して干上がり、陸地になります。浦河町の地面は、その海底が陸地化した部分でできているため、閉じこめられたアンモナイトが化石となって出てくるのです。一方、様似町の地面の大部分は東側にあった大陸に由来するものなので、アンモナイトが出ないという訳です。

# 第9回講座のおさらい

「浦河町の歴史 ～明治・大正時代を中心に～」  
講師 浦河町立郷土博物館 吉田正明 主任学芸員



## 1. 川の名に残るもともとの浦河の位置～元浦川～

「うらかわ」という地名は、アイヌ語のウララ（霧）ベツ（川）＝霧深き川に由来しているとされている。その川は元浦川を指していると考えられる。一方、オラカ（はらわた）に由来するという説もある。これは、元浦川のあたりで漁猟が行われ、魚獣の腸がたくさんあったというもの。

「浦川」の地名が初めて記録に現れるのは 1669 年のことだが、それ以前の文献資料が少ないため、いつから呼ばれていたかは不明。

1700 年に松前藩が幕府に献上した北海道地図「元禄御国絵図」には主な河川が描かれ、そこに地名が書かれているが、現在の元浦川河口付近に「浦川」の表示があり、現在の荻伏が「浦川」と呼ばれていたことが判る。1785 年の資料では「ウラカワ」に運上屋（場所制度時代の交易拠点施設）があるという記述があるが、1797 年の資料では運上屋は「ムクチ」（現在の向別）にあることになっている。移転理由は不明。

1855 年頃からは、浦川は元浦川（現在の荻伏）に地名が変わり、その代わり現在の堺町・大通がウラカワ（浦川は後に浦河と表記されるようになる）と呼ばれるようになったようだ。

## 2. 浦河馬牧の設置

馬追い上人としても知られる等澗院第 8 世住職慈真は、当時様似に預けられていた幕府の馬をもとに様似に馬牧場を建設する案を立て、1857 年幕府に建議した。これが日高における牧場計画の始まり。しかし、翌年函館奉行牧場掛による実地検分の結果、様似には適地がないという理由から、浦川に作ることが決定。浦河神社に残される絵馬から、浦川牧の完成は 1862 年と推測される。牧場の敷地は、西は浜荻伏、東は東栄、北は野深までであった。浦川牧は明治に入ると開拓使の管轄となるも、1870 年に廃止となる。なお、馬の多くは 1872 年に設置された新冠牧場（後の新冠御料牧場）に移されたようだ。



浦河牧新開成就絵馬（浦河神社蔵）  
文久 2（1862）年の日付がある

## 3. 浦河支庁の設置と変遷

明治 2 年、蝦夷地は北海道と改称され 11 国 86 郡に分割、現在の日高は日高国に。国郡全ての名称は松浦武四郎の命名。日高という地名の理由は「土地南向にて暖気濛靄（小雨やもや）等も早く相晴れ、天日を早くより仰居候事故」（「國名之儀二付申上候書付」より）とされる。明治 5 年、札幌開拓使を札幌本庁とし、函館・根室・宗谷・樺太・浦河の 5 支庁を設置。浦河支庁は日高と十勝の両国を所管。なぜ、支庁設置箇所に（様似ではなく）浦河が選ばれたのかについては、資料が確認できておらず謎。その後、行政組織機構の度重なる改編にともない、支庁も出張所や郡役所と名を変え、その管轄も変更を繰り返した。浦河支庁が復活するのは明治 30 年のこと。



昭和 12 年頃の浦河支庁庁舎

#### 4. 第4代浦河支庁長 西 忠義 ～至誠一貫の人～

1856年、会津藩士の子として生まれ、戊申戦争で不遇の幼少年期を過ごす。41歳で栃木県足利郡長に任じられ、足尾鉍毒事件に関わった。明治34年に浦河支庁長に就任。明治42年に小樽支庁長に転任するまでの間、日高の開発に多大な貢献を果たし、「日高開発の恩人」と称される。主な功績として、日高実業協会の創設（官民一体の開発計画・産業育成）、日高種馬牧場の誘致、日高教育会の設置（支庁長在任中に小学校21校増設）、交通基盤の整備、新規産業の振興（当時日高沖でも漁獲のあったカツオを用いた鰹節製造など）が挙げられる。相手がどんな立場の間人であっても、物怖じすることなく自らの「誠」を貫く人であった。昭和9年78歳で逝去。



西 忠義

昭和7年、西・元支庁長を日高開発の神として神格化し、日高実業協会と日高町村会が中心となって西霊社を造営、翌年西神社に改称。通常、存命中の人の霊を祀ることを「生祀」と言うため、「西忠義生祀」が名称としては適当だったと考えられる。全国で確認されている生祀は670あり、江戸時代に多く建てられた。記録上で最も古い生祀は平安時代のものだが、西忠義生祀が逆に最も新しいものに当たる。西神社は昭和27年の十勝沖地震で損壊したため、翌年西舎神社に遷座している。



西忠義が祀られている現在の西舎神社

#### 5. 赤心社の浦河開拓

赤心社は北海道開拓を事業の主体とする、明治13年に神戸で設立された会社組織。初代社長は鈴木清。ほとんどの人がキリスト教徒であったため、ピューリタン開拓とも言われる。社名の「赤心」は、「偽りのない心・まごころ」の意味。開拓地は最初から浦河に決まっていたわけではなく、石狩・渡島・胆振で探したが適地がなく、最終的に浦河の西舎になった。

明治14年の第一次入植団52名は、悪天候で浦河上陸が遅れ播種期を逃したほか、船内で腸チフスが流行したり、さらには別便で送った生活用品や開拓道具が択捉島まで流されるなど最初からつまづき、開拓は一向にはかどらなかった。翌年の第二次入植団83名（団長 澤茂吉）の入植先は荻伏に変更。西舎の入植地は後に整理され、入植地は荻伏に一本化された。

赤心社は子弟教育にも力を入れ、明治17年には寄付金を募って私立赤心学校を創立した。赤心学校は明治24年の浦川小学校荻伏分教場開校に伴いその役割を終えたが、大正14年には荻伏小学校付属農場「愛荻舎」を始めるなど、後々まで独自の教育活動を進めた。愛荻舎では乳牛を飼育し、牛乳販売の利益を資金にして修学旅行を行ったという。

熱心なキリスト教徒であった澤茂吉らの尽力により、赤川畔に信仰の拠点となる協会「浦河公会」が設立されたのは明治19年のこと。建物は明治27年に改築、明治31年に元浦河基督協会に改称、大正7年に現在地に移設された。昭和60年の浦河沖大地震により教会堂が著しく損傷したため、教会堂は新築され、古い建物は北海道開拓の村に寄贈移設された。



赤心社の開墾地風景



荻伏小学校付属農場 愛荻舎



明治二七年改築の元浦河教会  
(北海道開拓の村に現存)

## 6. 日高種馬牧場の創設

日清戦争（明治 27 年）や北清事変（明治 32 年）では、物資の運搬や大砲の牽引に国産軍馬を用いたが、小型で力不足のため途中で落伍する軍馬が多く、兵士が代わりを務めなければならないことも多かった。これが続けば日本の兵力維持が破たんする恐れがあったため、日露戦争中の明治 37 年、政府は軍馬改良のための長期計画を策定。計画には国有種馬牧場の設置が盛られ、全国の候補地から唯一選ばれたのが浦河の西舎。この立役者となったのが当時の支庁長、西忠義。宮内省などへの誘致活動を積極的に行うとともに、誘致を優位に進めるため、難所であった静内川の橋を架けた。その成果が実り、明治 40 年に日高種馬牧場が西舎に完成し、馬産地日高の基礎がつけられた。

終戦後の昭和 21 年には軍馬の改良生産から綿羊や産業用馬（サラブレッド含む）飼養に業務転換し、名称も日高種畜牧場に変更。さらに昭和 40 年には乳牛の育成牧場に業種転換し、平成 2 年には家畜改良センター日高牧場と改称するも、平成 5 年に閉場となった。

昭和 29 年には用地の一部が日本中央競馬会宇都宮育成牧場日高支所となり、札幌競馬場日高分場（昭和 32 年）を経て、昭和 40 年に日本中央競馬会日高育成牧場として独立した。前述の家畜改良センター日高牧場閉場後はその用地も取得し、育成調教施設が大規模に整備され、現在に至る。浦河優駿ビレッジアエル（平成 10 年開設）も同場敷地内にある。

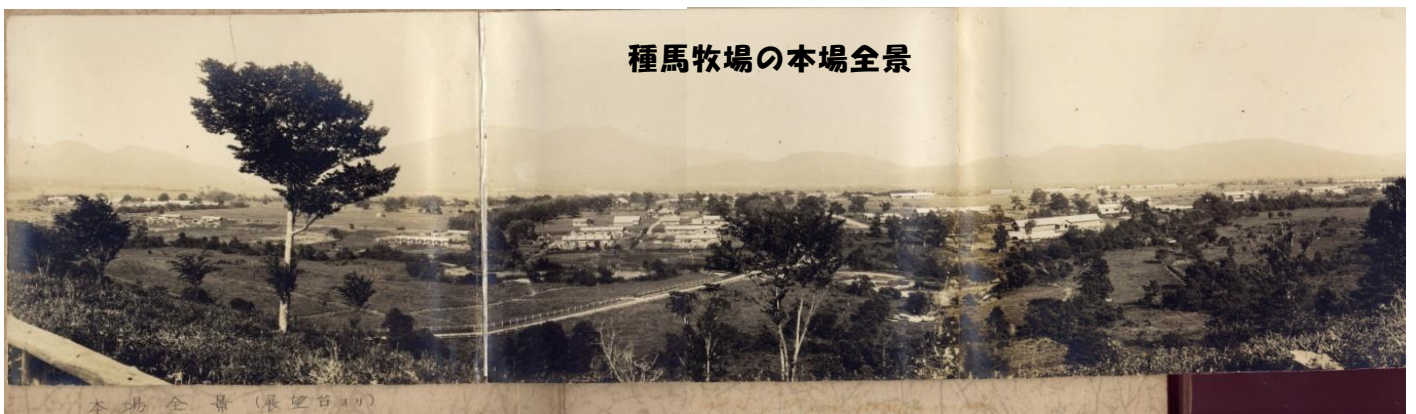


様似町内における徴発軍馬の列  
（昭和 16 年撮影）



牧草放牧地四、六（展望台下）

種馬牧場の放牧地



種馬牧場の本場全景

本場全景（展望台より）

今後の講座 第 10 回講座 2 月 22 日（水）夜 座学 「幕府の『異国境（いこくざかい）』認識と蝦夷三官寺」  
（予定含む） 第 11 回講座 3 月未定 夜 座学 様似の水産業（仮）



アポイ<sup>△</sup>ジオパーク

アポイ岳ジオパーク ふるさとジオ塾通信 Vol.15  
発行：2012 年 1 月  
発行元：〒058-8501 様似郡様似町大通 1 丁目 21  
様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会事務局  
（様似町役場商工観光課）  
電話：0146-36-2120 FAX：0146-36-2662  
E-mail：apoi.geopark@festa.ocn.ne.jp  
ホームページ：http://www.apoi-geopark.jp/